

第18回 第3章 近世社会の形成と庶民文化の展開

豊臣秀吉の全国統一

執筆・講師
山本博文

学習のねらい

低い身分から織田信長の家臣となり、次第に頭角を現した羽柴秀吉。本能寺の変で信長が家臣の明智光秀に討たれると、後継者争いに勝利し、朝廷から関白に任じられ、豊臣の姓を与えられた。秀吉が全国統一を行った経済基盤がどのようなものか、秀吉の政策の特徴は何かを理解する。

秀吉の全国統一

秀吉は、関白になると、全国の大名に天皇の命令だとして、戦国大名同士の戦いを「私戦」として停戦を命じた。そして、それに従わない九州の島津義久を1587年に降伏させ、1590年に小田原の北条氏を滅ぼして、全国統一を完成させた。秀吉は、征服戦争の過程で、全国各地に約200万石の蔵入地（直轄地）を設け、大坂・京都・伏見・堺・長崎などの重要都市や相川（佐渡）・大森（石見）・生野（但馬）の金山や銀山などを直轄した。このため秀吉の経済力は戦国大名に比べ圧倒的なものとなった。秀吉は、本拠地として壮大な大坂城を築き、また政治を行うため京都に聚楽第を築き、関白を辞めて太閤になると伏見城を築いて政治を行った。

検地と刀狩

秀吉の政策の中で特徴的なものは、検地と刀狩である。

検地は、土地を測量して、面積・等級・耕作人を調べて検地帳に明記した。一地一作人を原則とし、検地帳には一区画の土地ごとに耕作者の名前を記した。これによって、土地の生産力が米の量である石高で表示され、大名に与える領地も石高で表示し、これを基準に統一的な軍役を負担させた。秀吉は、1582年以降、畿内周辺を中心に検地を行い、本所などの荘園領主を頂点とする複雑な権利関係があった土地を、領主と土地を耕作する農民の関係に一元化し、中世を通じて存続してきた荘園制を解体した。秀吉は、関白になった後も、奉行を派遣して大名領に検地を行ったため、これらの検地を総称して「太閤検地」という。

1588年には、大仏殿建立のための釘やかすがいにするとして刀狩令を出し、百姓から刀・脇差・弓・鎗・鉄砲などの武器を取り上げて武力を奪った。百姓が一揆などを企てることを予防しようとしたのである。また家臣がかかえる奉公人（侍）が町人や百姓になることや、百

姓が商業や賃仕事に従事することを禁止する身分統制令（人払令）を出して、身分の固定化を進めた。軍役を果たす武士と、耕作に専念する百姓を身分的に区別する政策を「兵農分離」という。

朝鮮侵略

秀吉は、まだ全国を統一していないころから、大陸への出兵方針を表明していた。秀吉は、朝鮮に対し、日本への朝貢と明への侵攻の際の先導を求めたが、朝鮮はこれを拒否した。1592年、秀吉は朝鮮に15万人余の大軍を送って侵略戦争を始めた（文禄の役）。釜山に上陸した日本軍は、朝鮮の首都である漢城（現在のソウル）を落とし、平壤まで進出した。しかし、明の援軍が到着して朝鮮半島の南部にまで押し戻され、海上では朝鮮水軍を率いるイ・スンシンによって劣勢となった。秀吉は、明と講和交渉を行うが、交渉が決裂したため、1597年李舜臣戦争を始めた（慶長の役）。この戦いは、朝鮮半島の南部で行われ、苦戦を強いられた。1598年、秀吉が病死すると、五大老・五奉行は朝鮮にいる軍勢に撤兵を命じた。この戦争のため、兵糧などを運搬する百姓を多数動員したため、国内では荒れ果てる耕地が増え、大名間に対立が生まれ、豊臣政権の没落をはやめる原因となった。また、朝鮮も多くの犠牲者を出し、国土は荒廃した。